

齊藤 裕人 教授

芸術学部

学生の映画制作を支援

文化庁と大学が連携し都内ミニシアターで上映会
観客があってこそその映画づくり



齊藤 裕人(さいとう・ひろと)

平成2年本学芸術学部映画学科監督コース卒。7年同大学院芸術学研究科映像芸術修士、10年同研究科博士後期単位取得満期退学。7年映画学科助手、専任講師、助教授を経て、19年教授。研究テーマ「米のインディペンデント映画の調査」「デジタル画像/音響処理」など。論文「映像制作のためのデジタル研究」など。日本映像学会、美学会に所属。京都府出身。50歳。

映画制作課程のある大学がイチョシの一本を持ち寄り、上映する。映画は観客の目に触れて完成する芸術。一般の観客の反応を知り、プロの映画人から批評をもらって、制作者が成長するステップとなる。この「夢」を実現させたのが文化庁・本学主催の「大学連携による映画人育成のための上映会(STEP)」だ。

16の大学が参加

「STEP」は「Support、Tremendous Energetic and Progressive」の頭文字からとった略称だ。若者らしく斬新で意欲的な作品を世に問う意気込みを示す。STEPを企画・運営した齊藤教授が経緯を語る。「映画制作を正課で教える大学は多いが、横のつながりがなかった。大学同士が手結び産学官の連携を図り、教育研究を拡充しようと全国15の大学が平成24年3月に

「全国映画教育協議会」を設立しました。組織を立ち上げ、活動テーマを探した。「研究事務課から、文化庁の「次世代の文化を創造する新進芸術家育成事業」への応募を勧められ申請しました。意欲的な構想が評価され、25年度から3年間で採択された。初年度の参加校は主催校の本学をはじめ、桜美林▽大阪芸術▽京都造形芸術▽神戸芸術工科大学▽東京芸術▽東北芸術工科大学▽立命館大学▽早稲田の12大学。26年度は東京工芸▽東京造形▽武蔵野美術の3大学が新たに参加。27年度は城西国際が加わり16大学と

なった。STEPは新宿の名画座で3月中旬に4日間開催。26、27年度は新宿のミニシアターKs cinemaに会場を移し、同時に6日間開催した。各校の推薦1作品が期間中に2〜3回かけられ、監督、撮影、脚本、美術といった分野の第一人者が作品を講評する。STEPとは別に、文化庁の助成を受け、プロの支援を得て制作された若手作家の映画もかけられた。映画制作者を目指す先達の作品に触れ、学生は大いに創作意欲を刺激された。「入場料は無料で、時期も春休みという好条件。最初は観客数300人程度でしたが、27年度は1千人を超えました。半数は一般客だと思います。年間30〜40本が作られる本学部でも、学外で作品を披露する機会が多くなっています。著名な映画人が自分の作品を批評してくれるのは、若手映画人にとって大きな励みになります」



大学のスタジオで学生に撮影の基礎を教える

フィルムで基礎を学ぶ

2000年代に入り映画は撮影から上映までデジタル化されてきた。しかし、映画学科ではフィルムによる映画制作を今でも学生に学ばせる。「デジタル化はフィルム

磁気記録装置の高度化を追究
ナノ世界のギャップ埋める計算機シミュレーション
磁石の不思議な性質に一貫して挑む

鈴木 良夫 教授

工学部



鈴木 良夫(すずき・よしお)

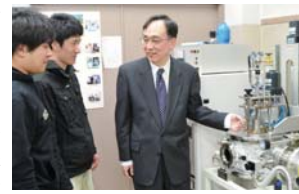
昭和53年東京大学理学部卒。55年同大学院理学系研究科修士課程修了。60年米ペンシルバニア大学工学系研究科博士課程修了。同年に日立製作所中央研究所。主任研究員となり、途中に東北大学電気通信研究所の客員助教授を兼任。平成22年に本学工学部へ移り教授。専門は物理学、電気電子工学。日本応用物理学会、電子情報通信学会、日本磁気学会、日本物理学会に所属。神奈川県出身。61歳。

物理学を専攻した動機は「一番基礎的な学問だったから、その中でも磁石はくつついたり、反発したりと、紀元前から科学論議のあった古い学問だ。それにもかかわらず、不思議な性質の全かが未だに解明され尽くしてない。それが魅力で、新たな発見を」という意気込みが研究を支える糧になったという。

大学院修士まではインバー合金と呼ばれる熱膨張率とか磁気特性に特異な性質を示す材料の原因究明に没頭する。そして、簡単に磁極を反転させることができるアモルファス金属に着目。その研究の世界的なリーダーであった米ペンシルバニア大学に留学して、研究に取り組んだ。アモルファス磁石は変圧器の鉄心利用され、エネルギー損失の大幅な削減に貢献した。

物理を専攻した動機は「一番基礎的な学問だったから、その中でも磁石はくつついたり、反発したりと、紀元前から科学論議のあった古い学問だ。それにもかかわらず、不思議な性質の全かが未だに解明され尽くしてない。それが魅力で、新たな発見を」という意気込みが研究を支える糧になったという。

「MOxHDD」と呼ばれる最先端の磁気記録装置は、発売されたばかりの光磁気(MO)ディスクの媒体の開発に従事する。レーザー光と光磁気記録媒体で構成された機器で、当時は光ディスクでデータの書き換えが可能なのはMOのみだった。担当した仕事はディスクに付ける記録媒体材料の開発であり、これもアモルファス材料だったので、大学での経験がたいへん役にたった。とはいえ、「MOディスク」とも呼ばれて多用された光磁気ディスクも、20年もしないうちに市場から消えた。続いて研究の中心となったのは、ハードディスク(HDD)の磁気ヘッドの開発だった。パソコンの要となるHDDは、データの記憶に磁性体を利用する装置。磁性体を表面に成膜した円盤の磁気ディスクを回転させる一方、レコードの針のような磁気ヘッドが磁界を発生させて磁性体を磁化する。このように磁気記録装置の高性能化を進め、人に役立つようにするのが我々の目標」と語る鈴木教授。ただしHDDが非常に高度になって、ナノ(10億分の1)単位位の微小な磁石が相手となった現状では、実験の結果を直接目にするのはたいへん難しくなった。そのため、実験の結果をまず計算機でシミュレーションするのが現在の研究最前線の模様。どう



新たな磁性積層膜の作成に向け、学生と研究に取り組む鈴木教授

試行錯誤のロス避ける

理論と実験のギャップを計算機シミュレーションで埋め、膨大な試行錯誤を繰り返すというロスを避ける。そんなマイクロマシンを用いて、磁気記録高度化を進め、その基礎となる磁性微粒子の磁化反転機構の解明を行うのが、鈴木教授が率いる磁気工学研究室だ。学生は約20人。「与えられた作業を機械的にこなすのでは駄目。卒業論文を書くにしても、テーマが何で、どういう内容を書くかを、まず自分で考えさせる」と鈴木教授。とはいえ時間がかかるし、なかなか正解にたどり着かない。それでも時間をかけて、相手するものがこの研究室の流儀。「自分で考える力や習慣を身につけることこそが、研究者の第一歩」との信念からだそう。